

服部晶夫先生を送る

松本幸夫（数学教室）

信濃町の慶応病院に、服部先生のお見舞にうかがったのはもう7、8年も前になります。当時、先生はスキーをはじめられたばかりだったそうで、その最初の練習日に骨折されてしまったとのことでした。ベッドの先生は少し情なさそうでしたが、それでも意外にお元気でした。はじめから骨折の話で申しわけありませんが、このお怪我は私にとって、印象的でした。そして、全くの運動音痴の私は何かしらとても励まされるものを感じました。

米国からお帰りになったばかりの服部先生の講義に初めて出させていただいたのは、たしか1969年の春ではなかったかと思います。全ての弱複素多様体に対して整数値をとる特性数を決定した「服部ストングの定理」によって、すでに世界的に有名になっておられた服部先生は、我々の目に、いかにも発刺とした若きトポロジストと映りました。第一印象は消し難いもので、今でも服部先生に対しては、「先輩」という感じが抜け切れません。この講義で先生は、ベクトル束を荷ったcobordism群のお話をされました。当時、私の関心のあった「多様体の手術理論」に深く関係する話題でしたので、この講義から多大の刺激を受けました。先生がcobordismを「コボルディスム」と発音された声が不思議に耳に残っております。

ささいなエピソードをもうひとつ挙げさせていただきますと、当時、柴田勝征氏（現在埼玉大学教授）が中心になって、ソ連のフィールズ賞受賞者ノビコフのCobordism理論に関するロシア語の論文を勉強しようということになりました。そして読み進むうち、「服部」というお名前がロシア語では「ガットリ」になってしまうということを発見して面白かったのもなつかしい思い出です。

その後、先生は変換群論の本格的な研究に向われ、日本に変換群論の強力な学派を打ち建てられました。また、葉層構造論に向われた田村一郎先生とともに、毎週開かれる「トポロジー火曜セミナー」で、我々後進のものを御指導下さいました。学部、大学院における先生のセミナーからは、現在トポロジーの最先端で活躍中の第一級の研究者が輩出しました。

先生は現在も活発に研究を続けていらっしゃいます。日本数学会理事長という要職をはじめ多くの公務をこなしながら研究を続けておられるお姿に、また励まされるものを感じます。最近では、インスタントンのモジュライ空間の位相幾何学的研究を開始されましたし、更に、変換群論の分野でも、多様体への S^1 作用と曲率の正値性の間に成立するであろう深い関連を予感され、その方面の研究を推進しておられます。

常にマイペースで、気軽で、きさくで、それでいて、あとからふり返って見ると驚く程の仕事をしていたらっしゃるのが服部先生であるような気がします。

1973年に東京で開かれた「多様体論国際会議」の時も、組織委員としての御苦勞には並々ならぬものがあつたと思いますが、しかし少くとも端目には、ごく気軽に仕事をこなしていらっしゃった印象しか受けませんでした。服部先生はいろいろの御病気を経験されたとうかがっていますが、あるいは我々の知らない所での御無理が重なってしまったのかも知れません。

今春、服部先生が理学部を去って行かれるのは、残されるものとしてまことに淋しい限りです。

これからもどうぞお元気で御活躍下さるようお祈り申し上げます。